

しが国際協力親善大使レポート

よしい ひろし
吉井 博さん

隊次：2015年度2次隊

職種：病虫害対策

派遣国：ドミニカ共和国

私は美しい自然や植物が好きであったため、食糧生産に寄与したいと、農学研究科大学院に進学して植物生理・生化学を専攻して研究者となった（農博）。その後、化学企業の農薬研究所に勤め、食糧増産に寄与する高活性で安全性の高い農薬の研究を34年間行ったが、遂に定年を迎えてしまった。「まだ研究をしたい、発展途上国の役に立ちたい、外国語の学習や視野を広げたい」との思いから、JICA ボランティア事業にシニアとして参加した。定年後の青春ではあるが、昨年7月から2か月間、JICA 駒ヶ根訓練所で海外長期滞在とスペイン語の特訓を受け、10月からカリブ海に浮かぶドミニカ共和国（人口約1000万、国土九州強）に3人の青年海外協力隊員と共に到着した。3人は大学を休学或いは卒業したばかりで、世界に目を向けた青春真っ只中の強者である。丁度私の息子2人（大学院生と大学生）と同じ年頃である（写真1）。今の日本は、世界で活躍できる人材が必要なので、彼らはまさに武者修行に出た貴重な人材である。



（写真1）現地スペイン語学校にて



（写真2）試験圃場での収穫作業

一方私は、還暦過ぎてから、自分の好きなことをやって、人の役に立てて、自分が更に成長して成果を出す、自己実現を目指している。許してくれた妻（小学校教諭）と子供たちには大いに感謝している。無事に帰ったら、妻を大切にして、優しくしてあげたいと思うようになった。日本を離れて分かることが結構多いものである。首都のサントドミンゴ市で1ヶ月の語学研修（写真1）の後に、ラ・ベガ市にある農業省の農牧林北部研究センターに赴任した。

まだ2ヶ月の活動しかしていないが、与えられた課題（東洋野菜の害虫防除と残留農薬低減）をどの様に解決すべきか、相方（カウンターパート）と同国の農業事情、農業行政、農業省の技術情報を調査して、研究計画を立てようとしている。その中では、研究所の試験圃場（写真2）にカウンターパートと出かけて収穫作業を手伝ったり、野菜生産者組合、商工会議所、農業省の技術者と会議をして、生産者の現地圃場を視察したりと、日本では体験できない素敵な人達との出会いと中米発展途上国のお国事情や文化を肌で感じて生活している（写真3）。



（写真3）研究所で農業技術者、相方と打合せ（写真4）マンションで一人暮らし

まさに毎日がエキサイティングとしか言いようがない。生活面では、見知らぬ街の広いマンションで一人暮らし、初めは寂しさと孤独感が襲ってきたが、慣れるもので最近はずる部屋で孤独を楽しんでいる（写真4）。町のカフェのマスターやスーパーマーケットのお嬢さんと顔見知りになり、友人がかなり増えてきた。通りで会うと、恥ずかしくなるくらいに、笑顔で手を振ってくれる。私の滞在中の目標の一つに、友人を多く作って、親しくなる事がある。滋賀県の親善大使、日本の緑の未来協力隊のメンバーにもなっているのである。農牧林研究センターの研究者から事務員、マンションのガードマンと更に多くの人と親しくなる様に、笑顔で挨拶と自己紹介を繰り返している。また、このドミニカ共和国では、日本人は、戦後の農業移民者の礼儀正しさや勤勉による成功から、尊敬されていると聞く。スーパーでも日本人と分かると品物を選んでくれたり、レジまで運んでくれたり、サービスが良くなる。漫画の影響から、おはよ！、ここにちは！、ありがと！など、少しイントネーションの違う日本語が店員から聞こえてくる。逆に、中国人はあまり好まれていない様であるが、理由は良く分からない。そして、日本人と雰囲気や清潔感が違うので、大体区別できると言う人も多い。また、技術の高さから日本車が約6割を占めている。中でもトヨタ車のランドクルーザー、ハイラックス、カローラが多い。少し高いが、丈夫で故障知らずとの評価を聞くことが多い。

これからが長期滞在の本番、日本を更に身近に感じてもらえるように活動し、目標とした成果が得られることを願って、異国での活動開始の紹介とさせて頂きました。

しが国際協力親善大使レポート

よしい ひろし
吉井 博さん

隊次：2015年度2次隊

職種：病虫害対策

派遣国：ドミニカ共和国

プロフィール

私は美しい自然や植物が好きであったため、食糧生産に寄与したいと、大学院博士課程で植物生理・生化学を専攻して研究者となりました（農博）。その後、化学企業の農薬研究所に勤め、食糧増産に寄与する高活性で安全性の高い農薬の研究を34年間行いましたが、遂に定年を迎えてしまいました。「まだ研究をしたい、途上国の役に立ちたい、外国語の学習や視野を広げたい」との思いから、JICA ボランティア事業にシニアとして参加しています。定年後の青春ではありますが、2015年10月からカリブ海に浮かぶドミニカ共和国（人口約1000万、国土九州強、GDP日本の約1/60）に到着し1年と2カ月が経ちました。自分の好きな研究をして、日本の技術や知識によって途上国の役に立てて、自分が更に成長して成果を出す、自己実現を目指しています。

国、地域、文化について

ドミニカ共和国首都のサントドミンゴ市は人口約200万強の中型都市で、地下鉄もあれば市営バス、グアグア（私営マイクロバス）、タクシーもあり、市内の移動には事欠きません（写真1）。当国は、コロンブスが第一回航海の時に新大陸と思って上陸した地で、旧スペイン領入植地にはコロンブス公園があり（写真2）、スペイン様式の街並みが見れることと、洒落たレストランや露店、店舗からなる商店街があり、好きな場所の一つです。すぐ近くのカリブ海岸沿いには、第2次大戦後に日本から入植した農業移民者の記念像があり、中米・カリブ海諸国の一つでしかないのに日本人の存在が感じられます（写真3）。先達日本人の人柄や勤勉さと農園やその他の事業の成功、日本のタフな自動車を始めとした技術力の高さから、日本人は好意的に受け入れられています。また、30年に渡るJICAの地道な支援活動も認識されているようです。7年前に来たJICAボランティアのK氏は、良い奴だった。5年前にいたY子さんは頑張り屋だったけど、今どうしてるか知ってる？と、顔と人柄の見える支援に親しみを抱いてくれています。



(写真1) サントドミンゴ市の主要道路



(写真2) コロンブス公園とその立像

ドミニカ共和国の経済は、主に出稼ぎ労働者による送金（米国や日本でのプロ野球選手やビジネス・サービス業）、農産物（バナナ、マンゴー、東洋野菜、葉巻、コーヒー、ココナッツ等）、手工芸品（宝石工芸品、絵画等）、産業製品（ラム酒、綿生地等）で外貨を得ています。

活動や生活について

私の活動は、東洋野菜の栽培に関係していて、野菜の主栽培地ラ・ベガにある農業省北部研究センターに赴任しました。ラ・ベガは、2月の毎週末に行われるお祭り（鬼の仮装行列）が有名で、全国から参加者と見物客が集まり、飲んで踊って楽しめます（写真4）。当国は、メレンゲ、バチャータ発祥の地で、普段から陽気で、みんな友達の意識が強い国民性ですが、音楽をガンガン鳴らして皆で踊ります。見物客も音楽に合わせて、自然に腰を振りステップを踏んでいるのが分かるのですが、かく言う私もです。



(写真3) 日本農業移民者の記念碑



(写真4) ラ・ベガ市のお祭り

私に与えられた課題（東洋野菜の害虫防除と残留農薬低減）を解決すべく約1年強活動しています。上記の問題は、農業指導者層に農薬に関する知識が殆どない事に起因しています。国立農業研究所の研究員、大学教員も知識と研究経験がないため、正しい取り扱い方が分からない状況です。これから、研究所や農業技術者、大学生に農薬について講演、講義をする予定です。私にとっての問題は、スペイン語のコミュニケーション力不足と配属先に活動予算が無いことで、現在改善に悪戦苦闘しています。課題の依頼先（野菜輸出

業組合、農業省技術者集団)に試験計画と予算書を提出、説明を行いましたがお金が無いとのこと。この1年間、農薬流通情報、実農家の栽培状況、病気や害虫の被害状況等を調査して回り、課題解決のために必要な最低限の計画を立てたものの、手も足も出ない。試験に必要な農薬の1つも買えないのでした。幸い、農牧林研究庁の国際協力局が韓国と台湾の支援プロジェクトの予算から、一部支出してくれることになり、圃場試験地も提供頂けることになりました。しかし、広すぎるのと雑草管理に手を焼きそうです(写真5)。



(写真5) 試験圃場の視察(私と農業研究所関係者)

正しい農薬の選択、取扱いや散布処理の実際を指導するために、更に不足予算を得るべく、関係先に働きかけを継続しています。途上国の技術研究の現状、現実を突きつけられた感じでした。これでは、残念ながら発展するはずがないと思うのですが、お国柄や教育、行政の問題ですので、一研究者の私としては、同僚の研究者や技術者に少しでも知識や考え方を残してあげたいと考えているところです。この経験やこの国の良い所と悪い所への思いは、帰国後の地域活動、技術指導や農業経営に種々活きるのではないかと考えています。

しが国際協力親善大使レポート

よしい ひろし
吉井 博さん

隊次：2015年度2次隊

職種：病虫害対策

派遣国：ドミニカ共和国

プロフィール

植物学の研究者で、農薬の研究を行って定年退職しましたが、「まだ研究をしたい、途上国の役に立ちたい、視野を広げたい」との思いから、JICA ボランティアとして活動しています。今は延長期間ですが、モチベーションは変わらず、むしろ強くなっています。3回目の寄稿となりますので、活動を中心にお話します。

国、地域、文化について

ドミニカ共和国（人口約1000万、国土九州強）は、中米、カリブ海諸国でトップクラスの経済成長率（6%強）で発展しておりますが、何か不思議な感じがします。農村部の生活、教育・研究水準、産業基盤の充実など、地道な分野の発展が遅れていて、見かけの発展の様な気がしてなりません。貧富の差が大きく、外国資本（欧州、米国）のあったところは先進国並みの施設やシステムで動いています。この様な先進的な会社や組織が、当国全体の発展や国民生活の豊かさをもたらしてくれれば良いと願っております。

首都のサントドミンゴ市は人口約300万の中型都市で、お金さえあれば日本での生活とあまり変わらず生活できます。自動車、バイク、電化製品、重機・農業機械、医薬・農薬等の工業製品も国際的メーカー代理店や輸入業者が販売しておりますが、工業製品の国産ブランドはまだ立ち上がっておりません。移動は日本の中古バイクが大半で、自転車に愛用されています（写真1）。裕福な人は日本、米国、韓国の中古自動車を購入しており、車は日増しに増えているのが分かります。当然首都は、朝夕と交通渋滞が起きています。



（写真1）銀行支店の駐輪場（自転車は殆ど無い）とガードマン

当国は、旧スペイン領なので、現地人（タイノ族）、アフリカ人（様々な部族）、スペイン人との混血（ムラートと呼ばれる）がドミニカ人として大半を占めており、全般的な国民性は、“みんな友達”の同胞意識が高く、明るく陽気（過ぎ？）です。

然し治安は、ご存知のように中米カリブ海諸国の一つですから、殺人、強盗、ひったくりなど、多発国です。ピストルが所持出来る事、貧困層が多い事、警察の士気や検挙率が低い事などが原因と考えられます。銀行には散弾銃を持ったガードマンが2・3人、活動先の農業省研究所には同じく散弾銃を持った軍人、アパートには門番が常駐しています（写真1）。

活動や生活について

前回（第30号）お話しした様に、経済は、主に出稼ぎ労働者の送金、農産物（タバコ、果物、カカオ、サトウキビ、東洋野菜、コーヒー、砂糖ギビ等）、手工芸品、産業製品（ラム酒、葉巻、綿生地等）で外貨を得ています。つまり、主産業は農業とその加工業と言うことになります。従って、当国のGDPや所得の向上には農業技術の進歩が欠かせないと考えます。

この国の農産物輸出額で4・5番目になるのが東洋野菜で、主に日系移住者が持ち込んだものです。私は、野菜の主栽培地ラ・ベガにある農業省北部研究センターでトウガラシとナスの病害虫防除の方法を研究・指導しております。



（写真2）農業研究所試験圃場の現地視察
（JICA 調査員、カウンターパート、テクニシャン達）



（写真3）テクニシャンへの農薬散布と散布器具
の取扱い指導

現在の課題（東洋野菜の害虫防除と残留農薬低減）を解決し、輸出野菜の欧州からの返品を減少させるべく2年強活動しています。この問題は、農業指導者層に農薬に関する知識が殆どない事に起因しています。国立研究所の研究員、大学教員も知識と研究経験がないため、正しい取り扱い方が分からない状況です。昨年1月から野菜輸出額1位のトウガラシと同3位のナスについて、模範栽培と病害虫防除方法の展示圃場試験を開始できました（写真2）。私にとっての問題は、スペイン語のコミュニケーション力不足と配属先に活動予算が無いことで、他国のODA予算とJICAの業務支援予算を受けて、何とか試験を開始しました。この過程で、カウンターパートとそのテクニシャンに農薬の取扱い方法を指導しています（写真3）。課題の依頼先（野菜輸出業者組合、農業省技術者集団）の一部の人に展示圃場を見学してもらい、同一農薬の連用を避け、各種農薬のラベルに従って正

しく使用すれば、病害虫を防除することが可能で、且つ残留問題も引き起こさないことを実証、説明しつつ、活動を終わろうとしております（写真4）。私の活動に興味を持ち、重要性に気付いてくれた日系農家の方や研究者・技術者の方は、ほんの一握りの方たちでしたが、この方々が生産仲間や指導者層に学んだことや感じたことを広げて欲しいと願っています。



（写真4）ナス試験圃場への農業省技術者の視察



（写真5）青年海外協力隊の作業協力（唐辛子のサツリングと害虫調査）

最後に、農作業や収穫調査を手伝ってくれた多くの青年海外協力隊の仲間達（写真5）と活動を支えてくれた JICA 事務所とボランティア調査員、日系農家の方々に心よりお礼申し上げます。